

「日本写真保存センター」調査活動報告(35)

—10 年余の調査研究活動を振り返る—

松本 徳彦 (前副会長)

「日本写真保存センター」の設立構想とは

「日本写真保存センター」の設立は、わが国の時代を色濃く記録した歴史的にも貴重な写真原板が散逸の危機に瀕している現状を防止し、保存管理、活用を図ることを目的に進める。この要望を実現することは、わが国の歴史、文化を継承するためにも必要なことであり、以下にその構想案を提示する。

目的と意義 日本における近現代の事象を撮影した歴史的に貴重な写真原板を収集、保存し写真文化の振興、発展に役立てると同時に、社会文化の研究や学術、教育、マスメディア等における利用促進を図り、もって国民文化の向上に寄与することを目的とする。

施設の設立は、写真界をはじめ、学術、教育、新聞、出版、放送などとの文化、情報界などからの強い要望もあり、早急な設立が望まれている。

調査と研究 地域文化を記録した写真等の発掘と保存を図り、地域文化の振興、教育現場での活用を目指すための調査研究を行う。

収集は地域分散型の保存を図り、インターネットでの閲覧、利用のためのシステムの構築を図る。

大学・大学院との共同研究により、他分野との連携を図る。

収集と保存 時代を色濃く記録した数々の写真作品(フィルム、乾板、湿板等)を収集、保存する。

当面は戦後期の10万点。最終的には100万点を目標とするが、すべての原板を、東京で保存することはず、発掘した地域等に分散保存し、インターネットを通じての利用を検討する。

収集、保存に当たっては、専門家による収集委員会を設けてこれに当たる。

さらに管理と利用は、写真界だけでなく、あらゆる分野の英知を結集して普及、利活用を進める。

施設の規模 交通至便な都心が望ましい。

収蔵庫 延べ1,500㎡

閲覧・展示室 延べ1,000㎡

管理・事務室 延べ800㎡

職員ほか 4～6名

といった構想案を文化庁に提出し、平成19年度から「我が国の写真フィルムの保存活用に関する調査研究」をすることになった。

■「日本写真保存センター」が調査研究活動を始めて10年余が経つ

この間に収集・保存してきた写真原板は、35ミリ、6×6、4×5、8×10までのフィルム、ガラス乾板が約40万点に及ぶ。この中で最も重要かつ貴重なものは、岩波書店から寄託されている『奈良六大寺大観』(全14巻)と『大和古寺大観』(全7巻)、『平等院大観』(全3巻)で、約4万点のカラーとモノクロのシートフィルムを収蔵している。

撮影者は渡辺義雄、入江泰吉、坂本万七、蘭部澄、米田太郎、小川光三、長野太造らによるもので、その精緻な撮影は古美術写真の最高のものと言われている。さらに編集委員が太田博太郎、倉田文作、西川新次など錚々たる執筆陣で、わが国のみならず世界の主要な博物館、大学、研究機関などが挙って所蔵する美術書史上最も貴重な研究書である。

カラーフィルムは経年変化による退色が一部に見られるものの、モノクロネガはつい最近撮られたもののよう保存状態が良い。利活用にあたっては、利用者が該当する寺院の許諾を得て、保存センターに写真利用願を提出し、精細な画像データから出版等に利用していただいている。

次に貴重な写真は、名取洋之助や木村伊兵衛、堀野

正雄、渡辺義雄、坂本万七、岡田紅陽らと「日本工房」のスタッフであった土門拳、藤本四八、小柳次一らが撮影した1934～40年代の『NIPPON』誌などに掲載された写真群約2,615本のフィルムは、わが国の報道写真、広告写真の先駆けと称される重要なもの。

さらに名取が関わった岩波書店の『岩波写真文庫』(1950～58年、全286冊)のフィルム約23,000本は、長野重一、蘭部澄、東松照明、熊谷元一、川島浩、織田浩らが撮影。敗戦から復興へと向かうわが国の様々な産業、農漁村から都市の日常、交通運輸機関などと国民生活の諸相をとらえた写真誌(A5サイズ、1950～59年、286冊)に使用した原板。この記録は画期的な企画で、写真のもつ記録性を活用した出版物として、歴史的な事実を伝える貴重写真群である。

次いで貴重なものに、1945年8月に広島と長崎に米軍機によって投下された原子爆弾による被爆直後の写真群は、世界唯一の原爆記録として、わが国にとって貴重な写真原板である。ヒロシマは被爆直後の松重美人(中国新聞社)、深田敏夫と、翌日以降に撮影した岸田貢宜、尾糠政美、川原四儀(広島平和記念資料館)らの惨状をとらえた写真、ナガサキは投下翌日の10日に撮影された山端庸介の原板(78コマ)も被災の実態を克明に捉えたものとして貴重である。さらに

同年10月から始まった文部省の原子爆弾災害調査の学術調査団の一員として、物理的調査に関わった林重男と、菊池俊吉の被災者の救護状況などを克明に記録した原板も被爆の実相を伝える写真としていずれも貴重で、後世に残すべき写真記録だといえる。

(＊ヒロシマ関係のフィルムは10月に入手予定)。

この他に「写真保存センター」では、明治期以降の日本人の営みを記録した様々な写真原板を収蔵している。主要なものを列記すれば、戦前のもものでは、江見写真場(津山)、旧日本写真協会『写真週報』笹本恒子、土門拳ら、敗戦直後の銀座(菊池)、神戸、横浜、新潟(渡辺)、東京(大東元)、横浜(浅野隆)、砂川、内灘(佐伯義勝)などのドキュメント。人物ものでは吉田茂元首相(吉岡専造)、原節子、笠置シズ子、美空ひばり(吉田潤)、志賀直哉、坂本繁二郎、巖本真理(片山摂三)、杉村恒(芸術家)、野上透(文士)など。さらに地方色の濃いものに瀬戸内の人々(緑川洋一)、佐渡を撮った岩宮武二、秩父の山村(南良和)、淡路島の人と情景(野水正朔)、日本の近代産業の遺構(山口直)などと、イタリア美術の名品を撮った(岡村崔)、シラサギで有名な(田中徳太郎)などが撮影した写真は、二度と撮ることができない写真群で、保存センターのデータベースで特筆できる内容のものである。

これらを中心に「写真保存センターのアーカイブ作

品として紹介し、利活用を図ることが最適であると考え。と同時に、「過去は二度と撮ることはできない」と述べた田沼武能名誉会長のメッセージは、写真の持つ記録性を大事にする、過去の教訓を後世に伝える資産としての重要性を尊重したいというのが本筋である。

文化庁は著作権者が不明の作品でも、教科書やネットでの利用活用の拡大を見込んで、著作権制度の改定を検討しており、「保存センター」が収集・保存している写真の活用が進むことが期待されている。

■「日本写真保存センター」の収蔵写真

人類は古代から己が見聞した事物を、後世に伝えるために様々な方法で記録を残してきた。スペインのアルタミラやフランスのラスコーの洞窟内の石壁に野牛や鹿、馬などを刻印した。エジプトでは石壁に人物像とともに象形文字で、宗教的な教えや伝記を刻し後世に残した。パピルスの発見以降は活字で印刷する技術を、その後19世紀になって写真術の発明で事物を瞬時にしかも精緻に記録する技術の誕生で、大量の情報を世に送り出し続けている。「記録」が歴史を残し、伝達する「力」を得て、写真の持つ「記録性」の重要性、有効性が重用される時代となった。人類は歴史を通して「知の世界、記録の意味」を利用、活用している。



「津山高女全生徒800人の記念写真」
1930年 江見写真場



「極東の共栄のために」1937年
土門拳([NIPPON]14号)



「婦人の区議や識者を招待してのストリップ観劇」1952年 笹本恒子



「腕白小僧」佐渡 1956年
岩宮武二



「射爆場に反対する村の子ら」
石川県内灘村 1953年 佐伯義勝



「白い村より」石灰工場の人々
1954年 緑川洋一



「原節子 芝浦製作所の扇風機」
1936年 名取洋之助



「銀座4丁目 服部時計店前」
1945年秋 菊池俊吉



「無言の帰国」淡路島 1956年
野水正朔



「奈良六大寺大観」より法隆寺金堂
1965年ごろ 渡辺義雄



「山村に正月が」秩父
1964年 南良和